「りんご３つください！」を多言語で

１．単元名 「りんご３つください！」を多言語で

２．単元目標

㋐　外国の市場などで注文をする簡単な表現「りんご３つください！」について、複数の言語に触れ、観察・比較・分析する。

㋑　特に音声面において日本語と外国語の共通点や違いに気付くとともに、外国語学習に必要な知識・スキルを育成しようとする。

㋒　いくつかの言語の共通点・相違点に対する理解を深めることにより、主体的に外国語を学ぼう・使おうとする態度を養う。

# 展開①

展開①の目標（評価規準）

言語が複数あり、多様であることを知る／馴染みのない言語の聞き取りをする

（関心・意欲・態度）馴染みのない言語でも、よく聞いてみようとする

（思考・判断・表現）聞き取った音を、自分の知っている方法で書き取ってみようとする

（知識・理解）言語が複数あり、多様であることを理解する。

１．児童に、「果物や野菜の名前」を、他の言語で言えるかどうか尋ねる。次に、「数字」を他の言語で言えるかどうか聞いてみる。

☆果物の名前は、英語では児童は既にいろいろな単語を知っていると思いますが、英語以外の言語でも知っている可能性があります。たとえば洋菓子の名前などから「フレーズ（いちご）、フランボワーズ（ラズベリー）、ポム（りんご）」（フランス語）だったり、「キルシュ（さくらんぼ）」（ドイツ語）を知っている人もいるかもしれません。

☆給食メニューで有名なチリコンカンのチリはスペイン語でchili、ピーマンや唐辛子のこと。またチンジャオロースの「チンジャオ」「青椒 (qīngjiāo)」は中国語でピーマンのことです。

☆数字は、フランス語のun, deux , trois　（アン・ドゥ・トロア）を知っている人が多いかもしれません。スペイン語ではuno dos tres (ウノ・ドス・トレス)となります。UNOというカードゲームが知られていますが、スペイン語の「１」ですね。また朝鮮語ではイル・イー・サン、中国語でイー・アール・サン、これも有名なので知っているかも？ ドイツ語ではEins アインツ, Zwei ツヴァイ, Drei ドライ、ベトナム語ではmột、hai、baモッ、ハイ、バー、タイ語ではหนึ่ง、สอง 、สามヌン、ソーン、サームとなりますが、これを知っている人は少ないはず

２．６つの異なる言語で「りんごを３つください」の表現を聞きます。
「フランス語、朝鮮語、ドイツ語、スペイン語、中国語、ベトナム語、タイ語」と黒板に書きます。

３．「どの言語が、最も書くのが難しいと思いますか」と尋ねる。

☆言語そのものが難しそうだったり、文字が難しそうと思ったりするでしょう。児童は聞いたことがない言語を一番難しいと答えるかもしれないし、聞いたことがあるので、難しいと思うかもしれません

３．音声をまず一度聞かせてみて、最初の反応を見る。

４．児童用プリントを配布、今度は「聞こえた通りに書き取ってみる」ように言う。「自分にできるやり方でやってかまわない。もちろん、オリジナルの文字では書けなくても構わないので、自分の知っている方法を使って書き取る」ように言う。カタカナでもひらがなでも、なんでも使ってOK

５．児童が聞きたがれば、何度も音声を流す。

６．質問をする。「どれがいちばん難しかったですか」「最初に難しそうと思った言語と、予想はあっていましたか、違っていましたか」「どの言語でも同じような難しさがありましたか」「どんなところが難しかったかを、言葉で説明できますか」

７．次は本物の文字と比較する、と伝える。

言語の例：

1. フランス語　Trois pommes, s’il vous plaît
2. 朝鮮語　사과 세개 주세요(sagwa segae juseyo)
3. ドイツ語　Drei Äpfel, bitte
4. ポルトガル語　Três maçãs, por favor
5. 中国語　請給我三個蘋果(Qǐng gěi wǒ sān gè píngguǒ)
6. ベトナム語　Xin hãy bán cho tôi ba quả táo
7. タイ語　ขอแอปเปิ้ลสามลูก(ค่ะ) (K̄hx xæ ppeîl s̄ām lūk(kh̀a))
8. 日本語　りんごを三つください。
9. ロシア語　"Мне три яблока, пожалуйста" (Men tri yabloka, pozhalusta)
10. スペイン語　Tres manzanas, por favor

# 展開②

展開②の目標（評価規準）

言語音の表記の仕方について、気付きを深める

（関心・意欲・態度）音声言語と書記言語がなぜ簡単に一致しないか、考えようとする

（思考・判断・表現）音声言語と書記言語が一致しない理由を表現しようとする

（知識・理解）言語音の表記は一通りには決まらないこと、日本語の文字も、音韻的価値が様々であることを知る

1. もう一度児童用プリントを取り上げ、録音を聞く。
2. 児童を4，5人のグループに分ける。
3. 書き写したものを比べさせる。タイミングをみて次の２つの質問を行い、グループごとに回答を引き出す。
	1. 他の人と比べてどんなことに気が付きましたか
	2. 書き写し方は一緒でしたか？　一部でも、一致した部分はありましたか？
	一致した部分には、下線を引いてみてください。
4. 考えてみましょう。「書き写しにおいて、一致しない部分があったのはなぜだと思いますか」
5. 次の結論に導く。
	1. まったく共通の音についても、書き写しには一致しない部分が残る。
	⇒つまり、言語音の書き写し方は、一通りには決まらない。
	☆日本語においても、助詞の「は」と「を」は、それぞれ「わ」と「お」の音と同じなので、それを区別するのは、音が異なるためではなく、文法的な意味を区別するためです。

また、発音された音が書き表される方法は「唯一でなくてはならない」わけではありません。日本語の「あかるい」に対して、「明るい」「明い」「明かるい」とは、そもそも、どれが正しいかは本質的に決めようのない問題であり、また、必ずしも決めなくてはいけない問題ではありません。もちろん学校では一応「明るい」と教えますが、現実社会では送り仮名には一定の自由度があります。「振り込み証明」と書いても「振込証明」と書いても「ふりこみしょうめい」と読むように。

* 1. 同じ文字を、異なる音を表すために使うことがある。
	⇒つまり、日本語にも、音韻の価値が定まっていない文字がある。
	☆英語の３、three(スリー)は、スリーと書かれることが多いのですが、実際には[th]の音は日本語には存在しないため、「トゥリー」のように揺れが出る余地があります。同様にフランス語の３、trois(トロア)は、トロアと書いてもよいし、トロワと書くこともできます。
	2. 日本語の文字では、今聞いたすべての音をカバーすることができない。

☆これはもちろん日本語の文字が悪くて、英語などを表すローマ字がすぐれている、ということでは決してありません。文字体系において重要なことは、その文字が書き表そうとする言語の、構造からくる要求にどれだけ充分に応えているかということです。

# 展開③

1. 児童を４、５人のグループに分ける。
2. カードを配布する。

☆ハサミであらかじめカード型にしておくと時間が節約できますが、カードに番号を当てはめておき、「番号を当てはめる」形で活動することもできます。

1. メッセージの書き取りを行った紙に、今度は「本物の書き方」のカードを当てはめるように言う。
2. 自分で考えた答えがあっているかチェックするため、もう一度録音を聞かせる。
3. グループごとに代表者を決めて、どうしてそのように選んだかを説明させる。
4. どのような手がかりから、回答を導こうとしたかについてクラスで共有する。

☆児童は、英語学習などを通じてローマ字の読み方を少し知っているので、ローマ字であれば、耳で聞いた音と対応させながら、カードを当てはめることができるかもしれません。それ以外の文字は、見たことがあるとか、エキゾチックだから、聞いたことがない言語に当てはめた、などの理由がありうるでしょう。

☆児童は、タイの近くにあるベトナムがなぜローマ字を用いているのか、気になるかもしれません。ベトナム語がローマ字を用いているのは、17世紀のフランスの植民地化において宣教師がこの文字の使用を広めたためです。ベトナムはもともと漢字文化圏であったため、漢字やベトナム固有の文字を使っていましたが、植民地化で廃れました。

1. 回答を示す。

☆ここで時間があれば、文字カードを見ながら、自分のプリントに書き写す活動をしても楽しいです。

# 展開④

1. 児童はグループに分かれて活動する。本物の文字で書かれたカードを用いて、それらを文字のタイプによって分類させ、得られたカテゴリーに名前をつける。

☆「ローマ字を用いたもの」「それ以外」に分ける場合や、１）ローマ字、２）中国語、３）その他に分ける可能性があります。
日本語やタイ語、ハングルについては、どのように扱ってよいか、児童は迷うかもしれません。タイ語もハングル、日本語の仮名は、ローマ字と同じく表音文字ですが、漢字はそうではありません。

☆日本語は表意文字である漢字と、表音文字である仮名を組み合わせた書記システムを持つ、世界でもユニークな言語です。

1. それぞれのグループに分類を発表させ、説明させる。
2. 児童に考えさせる。「ローマ字」を用いた言語の共通性とはなにか？　「表音文字」を持つことの意義はなにか？

☆表音文字はもともとのものの名前の「意味」から離れ、「音素」のみを表すことができる言語です。

☆ローマ字を用いる言語を使う国の、地理的な共通性を挙げるかもしれません。（ベトナム語のように、植民地化によって文字を変更した言語もあります。）

☆日本語で日常使われる音節は「ん」を除くとすべて「母音」または「子音＋母音」の組み合わせとなっており、その数はわずか102（数え方によっては112）と少数であるために、その一つ一つに固有の名称、つまり文字をふりあててしまえば、すべての用が足ります。そのうえ、同一の文字に濁点や半濁点を加える工夫をしたり、二つの文字を合成して拗音（きゃ、ぴゃ、など）を表すように工夫すれば、必要な文字の数は、いろは47文字で済みます。

☆これに対して、ローマ字のアルファベットは26文字しかないので、「ローマ字の方が簡単だ」という印象を持つ人があるかもしれません。しかし、このような数の上での単純比較はあまり意味がありません。英語などの言語は、日本語と比較するまでもなく、「音節の種類と数」とが膨大にあるため、それぞれの音節ごとに文字を決めてしまうと到底覚えられず、用をなさないため、そこで単音ごとに表すことができるアルファベットが使われています。それはローマ字を用いている言語の構造によってある程度要請されたもので、日本語の仮名は日本語の構造にたいへんよく合うように作られています。